

批評

疫病を読みなおす視点

——新型コロナウイルス禍と「戦争」の比喩——

塩野麻子*

現下のコロナ禍において、新型コロナウイルス感染症対策をめぐる「戦争」を引き合いに出す政治指導者の発言に注目が集まった。フランスのマクロン大統領はテレビ演説で「我々は（新型コロナウイルスとの）戦争状態にある」と語り、アメリカのトランプ大統領は自らを「戦時下の大統領」に喩えた¹。このような「戦争」のアナロジーは、私たちに異常な現実を知らせるのに「役立つ」一方「戦争」の名のもとに個人の自由が容易に奪われる恐れがある。このような「戦争」のアナロジーは多くの論者によって「平和の時代用いてはならないもの」として批判されてきた²。

ところで、新型コロナウイルスの感染拡大をうけて日本で人気が再燃した小説がある。アルベール・カミュの『ペスト』（新潮文庫）である。4月上旬には『ペスト』の発行部数は累計100万部を突破したほか、同作品を漫画化した書籍が相次いで刊行された³。

この背景には次のようなことがあったと考えられる。未曾有の危機に直面したとき我々はしばしば災厄の歴史を持ち出し、そこから危機を生き延びる指針を得ようとしてきた。今回のコロナ禍も例外ではない。新型コロナウイルス感染症⁴の流行に際して疫病との「闘い」の歴史を参照することで、人類はさまざまな疫病の流行に直面し、それでもなお生き延びてきたことを我々は確かめてきた⁵。

最も参照された歴史のひとつがペストの歴史である。識者間では中世ヨーロッパのペスト流行を現下のコロナ禍に重ね合わせ、そこからコロナ制圧の手掛かりを得ようとする動きが相次いだ⁶。コロナ禍が中世のペストを想起させた要因としては、ペストと同じようにコロナが大量死をもたらしうる災厄だと捉えられたこと⁷、コロナ対策として講じられた隔離や都市封鎖、検疫の起源が中世ヨーロッパのペスト流行に求められたことなどが挙げられるだろう。ペストは現下のコロナ禍とオーバーラップするものとして捉えられ、その歴史から何らかの教訓を得ることが期待された。『ペスト』の「再発見」はこうした流れのなかにある。

『ペスト』は、一般的に、第二次世界大戦におけるドイツ軍のパリ占領を寓話化した作品として理解され、「戦争」もふくむ受け入れがたい災厄すなわち「不条理」を扱ったものとして読まれてきた。しかし、コロナ禍をうけて『ペスト』は文字通りペストとの闘いの記録として読み替えられるようになった。その傾向は、特に一般向けの作品解説に顕著だ。

例えば、NHK教育テレビジョン（Eテレ）の番組「100分de名著」のテキストである中条省平『アルベール・カミュ ペスト——生存をおびやかす不条理』（2018年、以下「2018年版」）とその愛蔵版『アルベール・カミュ ペスト——果てしなき不条理との闘い』（2020年、以下「2020年版」）とを比べてみると「2018年版」では、中条は『ペスト』を次のように評している。『ペスト』は「ペストという災厄が戦争という現実と重」なっているように描かれているが、それは同時に、現代日本の抱える「震災と原発事故以降の恐怖と不安の記憶、不愉快な閉塞感」とも、

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2018年度入学 生命領域
日本学術振興会特別研究員(DC1)

重なり合っている⁸。作中で描かれた疫病流行は「戦争」はもとより天災の経験や社会閉塞など他の「不条理」に置き換えることが可能だと考えられた。『ベスト』は、そのような普遍性をもつものと中条はとらえていた。こうした中条の評価に、すくなくとも、ベストの名を冠した小説に疫病との向き合い方を直接くみ取ろうとするような、素朴な態度はみられなかった。

これに対して「2020年版」においては、中条は『ベスト』で描かれた人間生活やその心理とコロナ禍で現に観察された我々の行動様式との類似点を挙げ、カミュの高い先見性を強調している。例えば、災厄に乗じて商売にいそしんだ犯罪者コタールは「マスクを買い占めて高額で転売する商売人」に喩えられ、作品の舞台であるアルジェリアの町オランの閉鎖はコロナ禍におけるロックダウンになぞらえられた⁹。これによって中条は『ベスト』を現下のコロナ禍を映し出す合わせ鏡として位置づけた。

また中条は作中におけるカミュの人間中心主義批判に言及し、これが現下のコロナ禍で重要な論点になっていることを指摘する。人間中心主義からの脱却をコロナ禍における新たな思想的課題であるとみなす認識が多くの人文社会学者によって共有されているなか¹⁰、中条は『ベスト』を、コロナ禍をめぐる思索を先取りするものとして再評価した。

このようにして「戦争」の寓意として読まれてきた『ベスト』は、未曾有のパンデミックを経て、疫病との闘いをめぐる記録として読み直された。それによって、コロナ禍もまた「不条理」を象徴するものとしてとらえられ、作品の背景にあった「戦争」と現下のコロナ禍とが等価のものとして打ち出された。『ベスト』の読み替えは、コロナ禍を「戦争」と共通の次元をもつものすなわち「不条理」として思考することを可能にしたといえる。

もしそうならば、政治指導者たちが好んで用い、それが問題にされるような「戦争」のアナロジーを問い直す必要があるのかもしれない。たしかに、疫病への対応に「戦争」が引き合いに出されることで個人の自由が容易に制限され、自由か生存かの二者択一が強要されることにつながる危険がある。しかし、そうだからといって「戦争」にまつわる言語を「平和の時代に用いてはならない」ものとみなし、使用を非難することは正しいのだろうか。中条が記したようにコロナ禍は「戦争」と共通の次元をもちうる「不条理」である。「平和の時代」において生活上の制約を強いられ、自由が制限され、生きるべき者と死すべき者との選別があらゆる局面に顔を出しているような「不条理」がもし現に起こっているものと解しており、かつそのような状況に「戦争」を見出すのならば、それはもはや隠喩などではない。「平和の時代」の災厄を明示する言語そのものである。

「平和」と「戦争」がもはや二項対立的な観念として捉えられないと理解したとき、私たちはミシェル・フーコーの次の叙述を思い起こすべきであろう。「戦争こそが制度と秩序の原動力なのです。平和は、その最も小さな歯車においてさえ、暗黙のうちに戦争を続けているのです。言い換えれば、平和の下に戦争を解読すべきなのです。戦争、それは平和の暗号そのものである」¹¹。

現下の「不条理」に抗う術を探すのならば、私たちは「戦争」のアナロジーを忌み嫌うのではなく、むしろ、国民に一致団結を求め社会統制を容認させるための用法とは別に、私たちが直面している「不条理」を告発するための方法として用いていかなければならない。

文献と注

- 1 「首脳、コロナ例えて… トランプ氏「戦争に勝つ」／メルケル氏「大戦以来の挑戦」／マクロン氏「戦争状態」『朝日新聞』2020年3月20日、朝刊、11頁。
- 2 例えば、Simon Jenkins “Why I’m taking the coronavirus hype with a pinch of salt,” The Guardian, March 6, 2020. <https://www.theguardian.com/commentisfree/2020/mar/06/coronavirus-hype-crisis-predictions-sars-swine-flu-panics>
- 3 「小説「ベスト」100万部突破」『毎日新聞』2020年4月9日、東京朝刊、23頁。『ベスト』を漫画化した書籍に小川仁志監修、前山三都里画『まんがでわかるカミュ『ベスト』』宝島社、2020年、ほか。
- 4 以下「コロナ」とする。
- 5 例えば、「疫病と日本人、闘いの物語」『朝日新聞』2020年5月17日、東京朝刊、17頁。
- 6 例えば、濱田篤郎『パンデミックを生き抜く——中世ベストに学ぶ新型コロナ対策』朝日新書、2020年。
- 7 コロナ流行初期から、コロナ感染者の多くは「軽症」であることが専門家によって指摘されてきた。しかし、特にコロナによる死者の

増加が深刻だったイタリア北部——教会の床に並べられた大量の棺に司祭らが手短に聖水をまく——の様子などが報じられると、否応なしに中世ヨーロッパのペストを想起させずにはいられなかっただろう (Flavio Lo Scalzo “Italy small town priest deals with death on industrial scale,” Reuters, MARCH 28, 2020. <https://www.reuters.com/article/us-health-coronavirus-italy-coffins-idUSKBN21F0M6>)。

- 8 中条省平『アルペール・カミュ ペスト——生存をおびやかす不条理』NHK 出版、2018 年、9 頁。
- 9 中条省平『アルペール・カミュ ペスト——果てしなき不条理との闘い』NHK 出版、2020 年、128-129 頁。
- 10 例えば、塚原東吾「コロナから発される問い——二一世紀のコロンブスの交換、「人新世」における「自然」」『現代思想』第 48 巻第 7 号 (2020 年) 145-155 頁。
- 11 ミシェル・フーコー (石田英敬、小野正嗣訳)『ミシェル・フーコー講義集成 VI 社会は防衛しなければならない (コレージュ・ド・フランス講義 1975-76 年度)』筑摩書房、2007 年、53 頁。

